

二木 沙和
FUTAKI Sawa



微笑み
油彩、キャンバス



掌
油彩、キャンバス

掌

これまで、自分や周囲の女性たちがおかれた状況を女性の社会的な立場に基づいて解釈し、物語のように絵画によって表現してきた。教職課程で青年心理学などを学んだ経験と、自分が実際に感じた事柄を題材に制作しているため、モデルは性差を意識し始め精神的にも揺れ動きが強い思春期から青年期までの女性が主である。

「女の子は愛嬌だ」と思春期に言われ、「女だから笑わなければいけない」という強迫観念から着想した油彩画を卒業制作では描いた。「女の子らしい」という言葉は、褒め言葉として機能することの方が多い。「笑顔に愛嬌がある」という褒め言葉に嬉しさを感じつつも、鏡に写った自分の笑顔が媚を売っているように見えて戸惑いを持った時期があり、絵画としてとどめたいと思った。時代は変わりつつあり、女はこうあるべきという意識はタブー視されつつある。その結果、仮に作られた笑顔でも、義務感ではなく相手への優しさや心遣いのためでもあると意識する場面も増えた。しかし、今も政治家や著名人の女性蔑視的な発言が度々浮上する。性被害を告発し、被害経験を共有する#MeToo運動も活発に行われており、根底では解決できていないのが現状である。

修了制作『微笑み』、『掌』では、曖昧な微笑みを浮かべる女性の顔と、ベッドの上で蹲る女性を連作として描いた。『微笑み』では、笑うことの義務や「女は愛嬌」と言う言葉から少しだけ解放された気持ちと、未だついて回る女性に対する意識や被害への不安な気持ちを、笑うとも悲しむとも言えない曖昧な表情で表現したかった。『掌』では、少し嫌になった1日を和らげるように共感し、掌を伸ばしそっと撫でてくれる誰かがいたらという想いで描いた。歳を重ねるほど、性別によるカテゴライズやコミュニティ間での暗黙のルールなど、日常の中で実感するものが増えていく。他者と自分の優劣を比較し、人の悪意や無意識の中にある偏見に気づいて傷つく。だが、その辛さを和らげてくれるのもまた人の暖かさであると私は思っている。

今、ジェンダーに対する人々の意識は大きな変化の真只中にある。時代の変容と、根底に残る問題に対する意識の一枚、そしてその気持ちに寄り添う一枚を連作にすることで、自身のこと、そして未来のことについて考えた。鑑賞者にも、今一度自分と照らし合わせて考えて欲しい。すぐに変わるものではないが、同時代に生きる私たちの中で、同じ苦しさを耐えている誰か、先導を切って社会を変えようとする誰か、また掌を伸ばして寄り添ってくれる誰かがいる。変わりつつある社会が、これからもほんの少しずつでも良い方向に変わっていけば嬉しい。